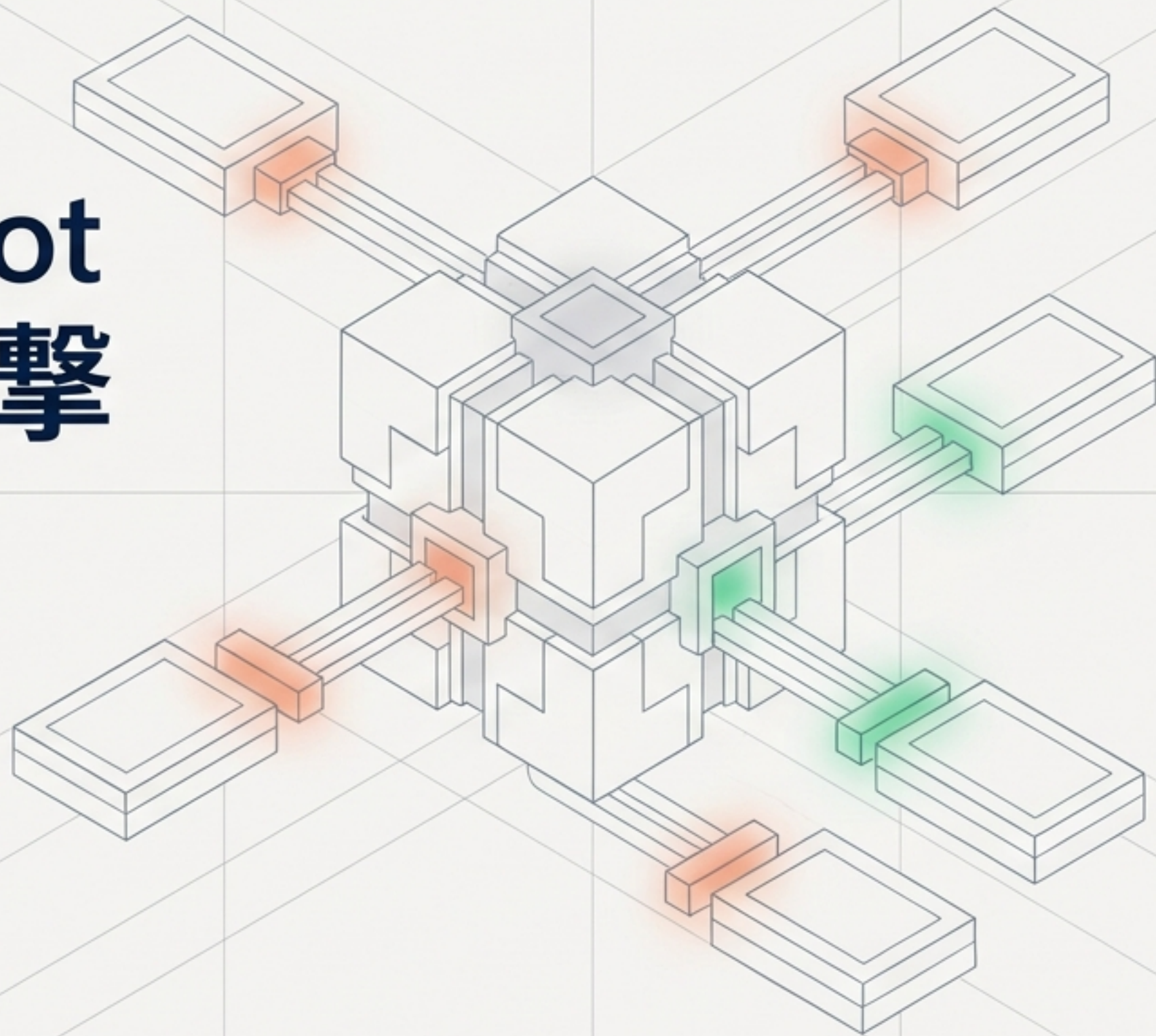


STRATEGIC EXECUTIVE BRIEFING

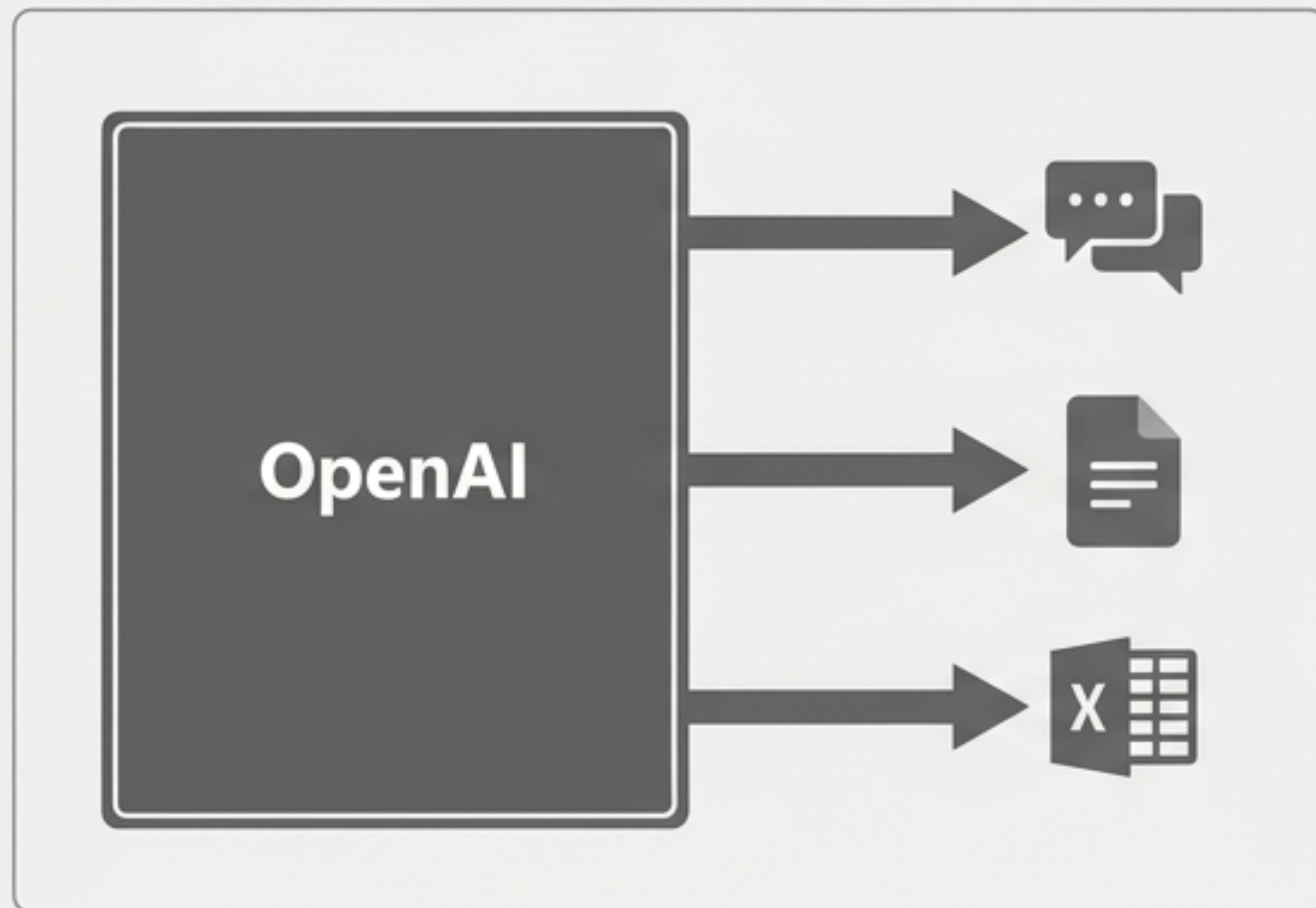
Microsoft 365 Copilot マルチモデル化の衝撃

Claude Opus 4.8追加がもたらす、
エンタープライズAIの
「オーケストレーション層」へ
の転換とガバナンス戦略

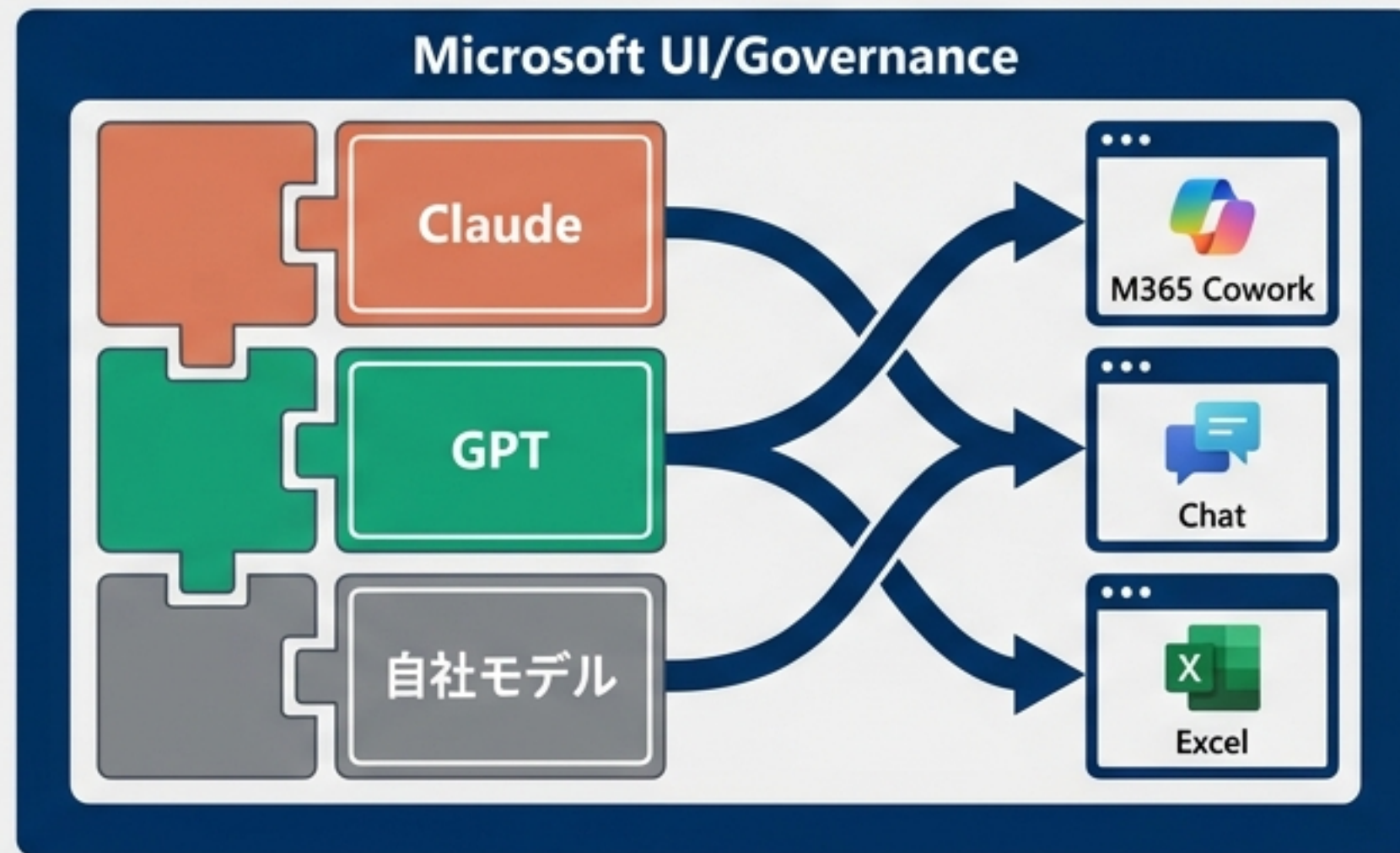


M365 Copilotは「単一モデルの製品」から 「マルチモデルの業務基盤」へ進化した。

BEFORE: モノリシックな単一モデル依存

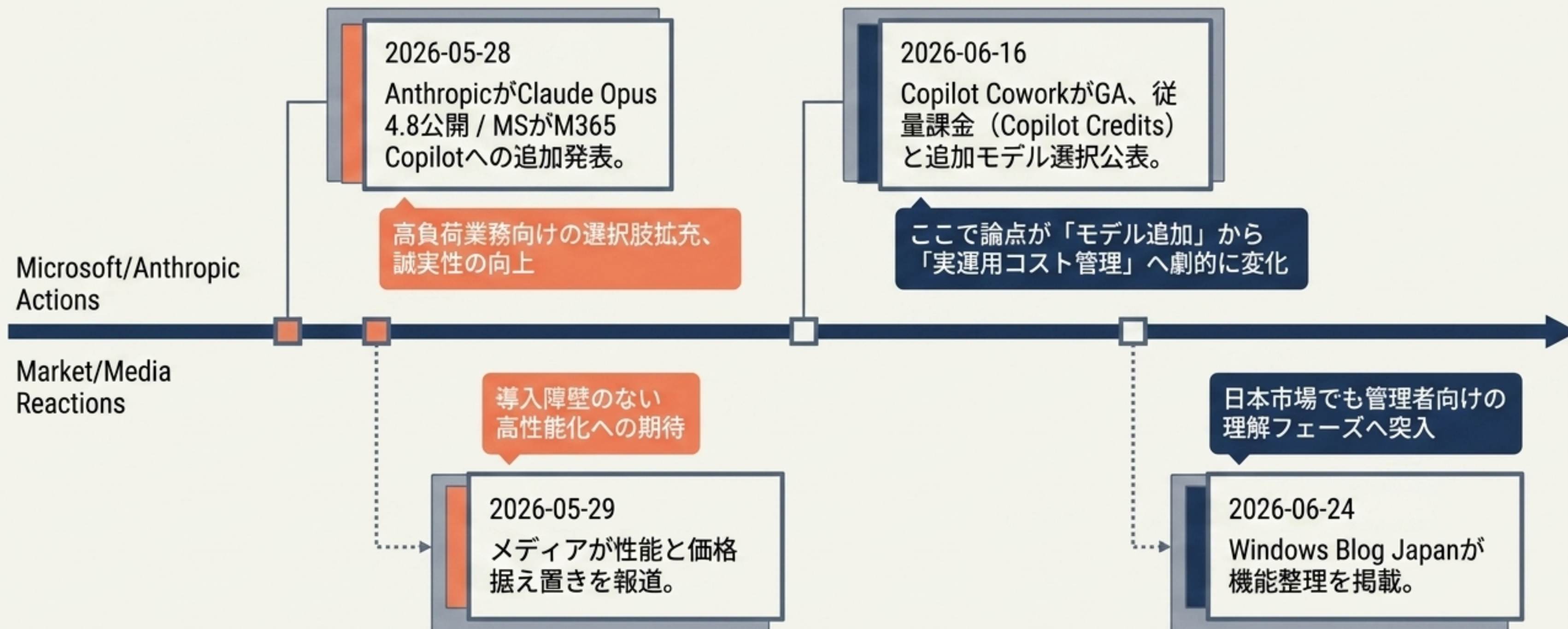


AFTER: マルチモデルとガバナンスによるオーケストレーション



- **事象:** 2026年5月28日、M365 Copilot (Cowork, Chat, Excel等) に「Claude Opus 4.8」が追加。
- **意味:** 企業は「最強のモデルを1つ選ぶ」時代を終え、「複数モデルをガバナンスの枠内でどう使い分けるか」を設計するフェーズへ移行。
- **行動:** 複雑なタスクでの試験導入と同時に、Anthropic特有のデータ処理リージョン制約や従量課金 (Copilot Credits) に対するガードレールの再整備が急務。

「性能への期待」から「運用・コスト管理の現実」へのフェーズシフト。



モデル選択の自由は、三者三様の「期待」と「懸念」を生み出している。



経営層・実務家



規制対応・管理者



現場ユーザー

● 歓迎

「用途別にモデルを使い分けられるプラットフォームの変化を評価する」

焦点:

- ・法務、データ分析、ブラウザエージェント等の高負荷・高精度業務でのROI向上。

● 警戒

「EU Data Boundary対象外？HIPAA対応やデータ所在地はどうなる？」

焦点:

- ・コンプライアンス、リージョン制約、政府クラウドでの可用性、サブプロセッサ契約の複雑化。

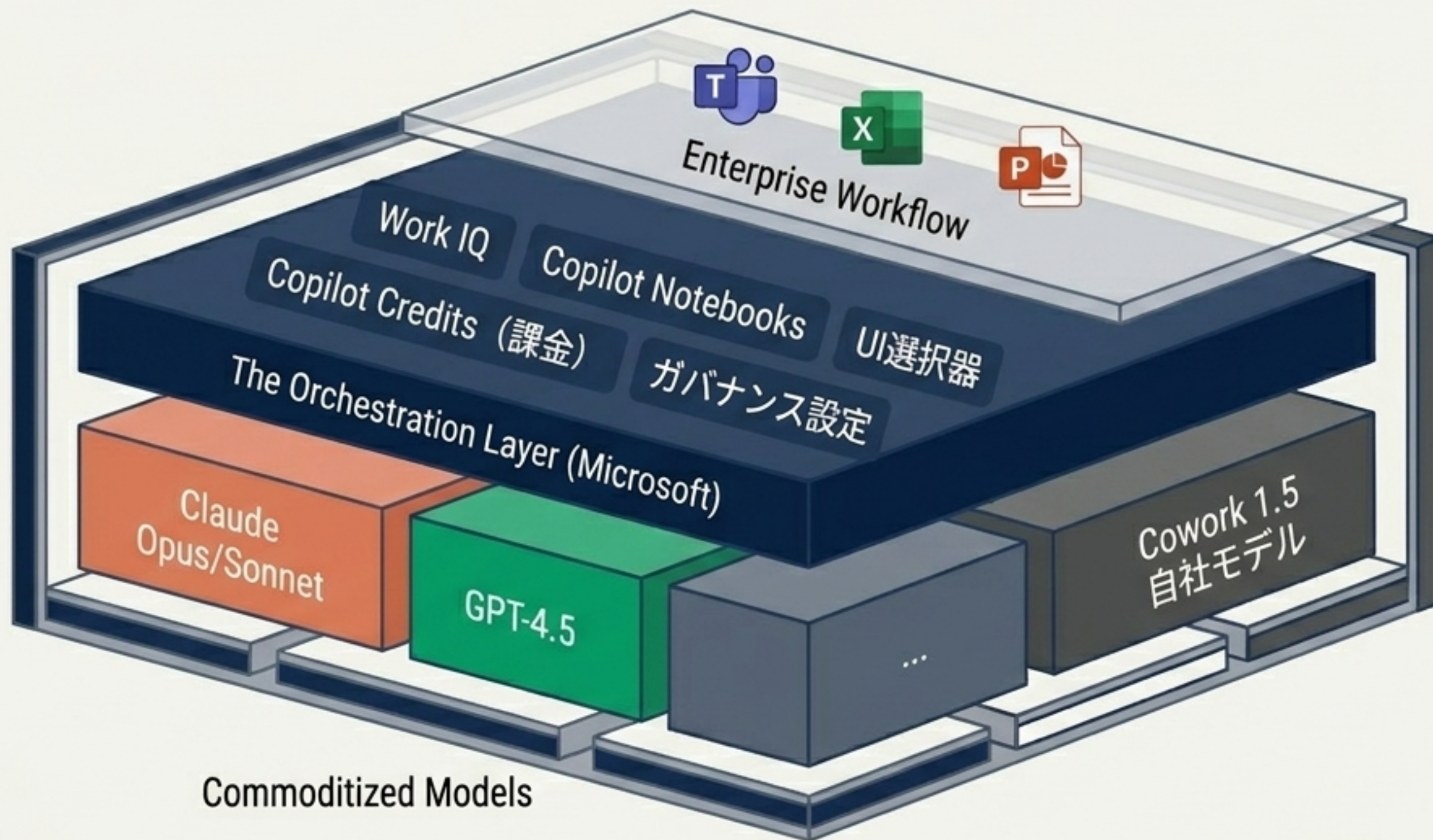
● 期待と困惑

「Claudeの方が賢く感じるが、利用制限やトークン上限が不透明で実務に組み込みづらい」

焦点:

- ・既存Copilotの品質のブレ、コストの正当化、GPT-4.5（自律性）とOpus 4.8（誠実性）の使い分け。

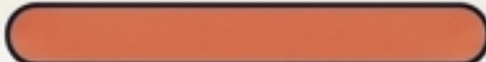

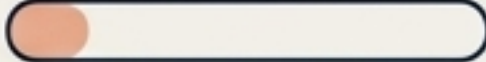





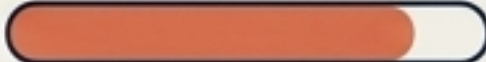





バリューチェーンの逆転：競争の主戦場は「モデル」から「制御層」へ。



Takeaway Message

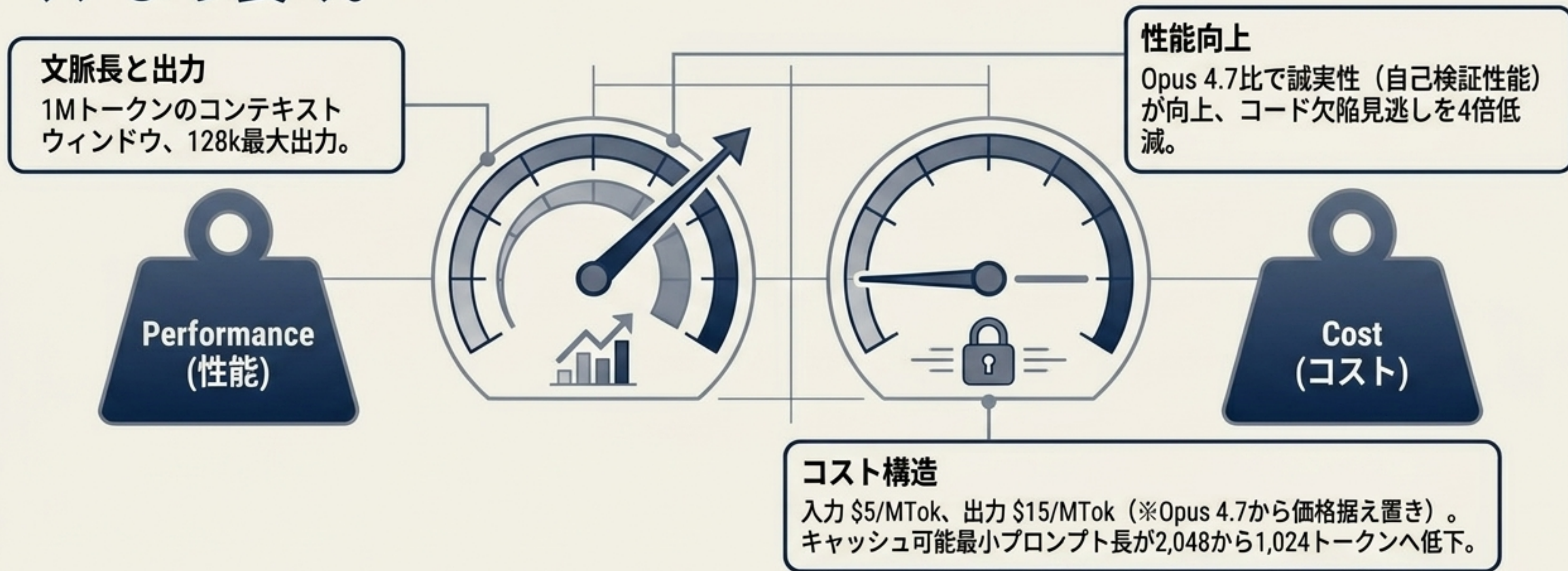
企業はOpenAI単一モデルへのロックインからは解放されるが、複数のクロスクラウドAI（Azure AI Foundry経由）を安全に束ねる「Microsoftのオーケストレーション層」へより深くロックインされる。

用途別AIモデル比較：タスク特性に応じた「最適な頭脳」の選び方。

モデル	主用途	特徴	適性（推論/速度）
Claude Opus 4.8	深い推論、複雑調査、重要文書。	多段タスク、長時間ワークフロー、より高い忠実性、1Mコンテキスト、128k出力、適応的思考。	推論   速度  
Claude Sonnet 4.8	日常業務、高速下書き。	短い応答サイクル。	推論   速度  
Sonnet + Opus Advisor	重要成果物の二重確認。	Sonnetで高速生成し、Opusが監修する二段階レビュー。	推論   速度  
GPT-4.5	汎用、長文執筆、引用。	自律性や長時間セッションでの一貫性に優れる。	汎用性  

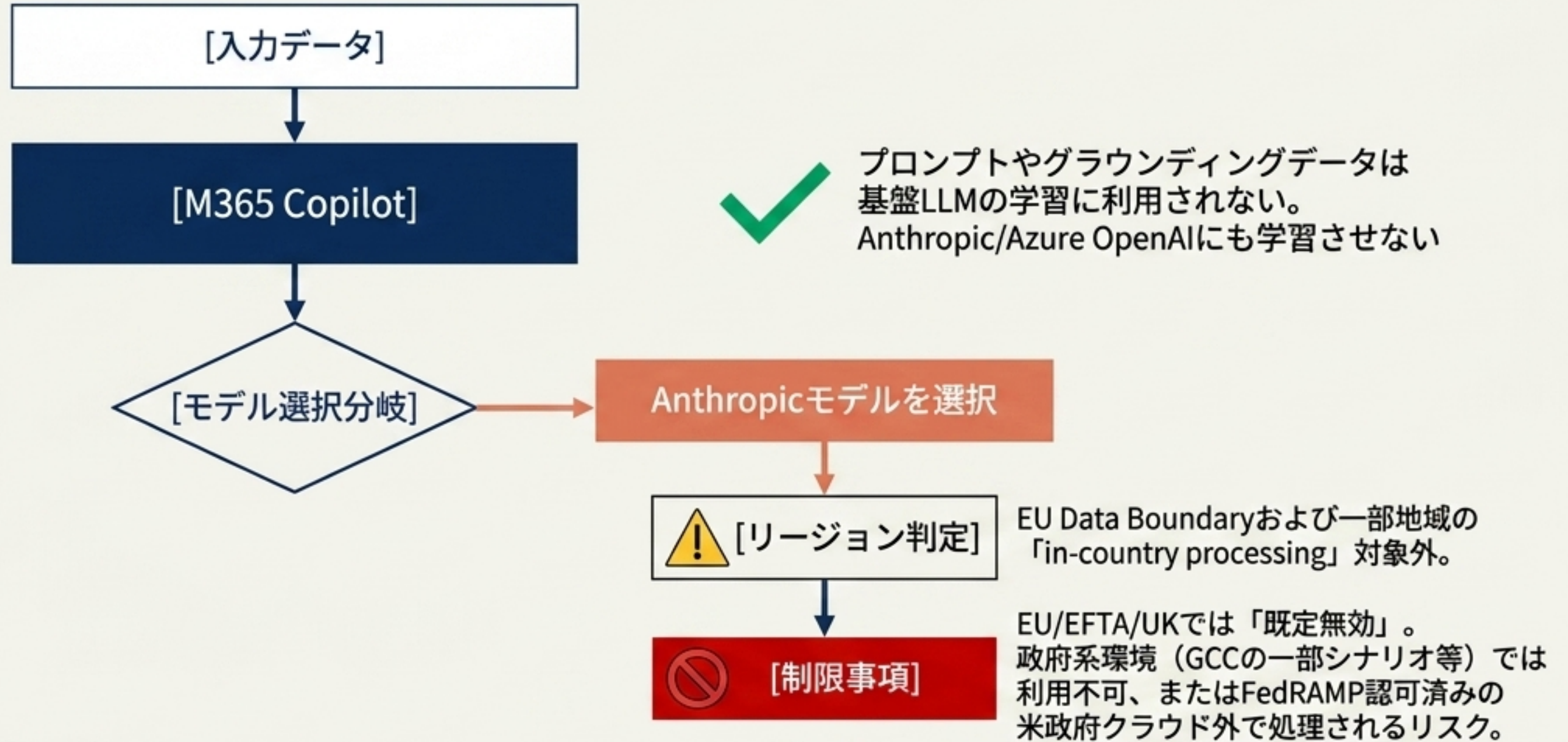
※既定の設定は「Auto」。ユーザー教育の焦点は「良いモデル探し」から「どの業務にどのモデルを当てるか」へシフトする。

Opus 4.8の技術的インパクト：据え置きのコストで、より深く、より長く。



長文コンテキストを多用する法務・調査・資料作成において、「追加コストなし」で劇的な性能改善を享受できる。ただし、API互換性は概ね維持されている。

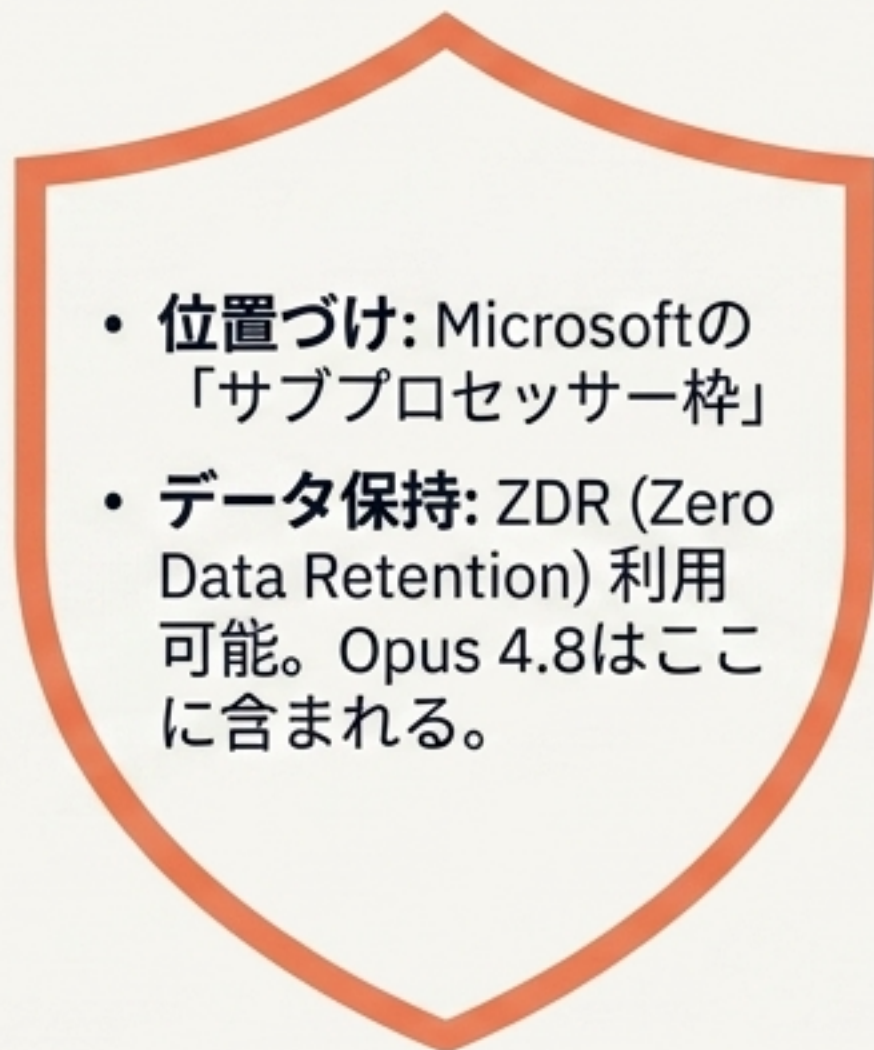
ガバナンスの死角：「学習除外」と「自国内処理」は別問題である。



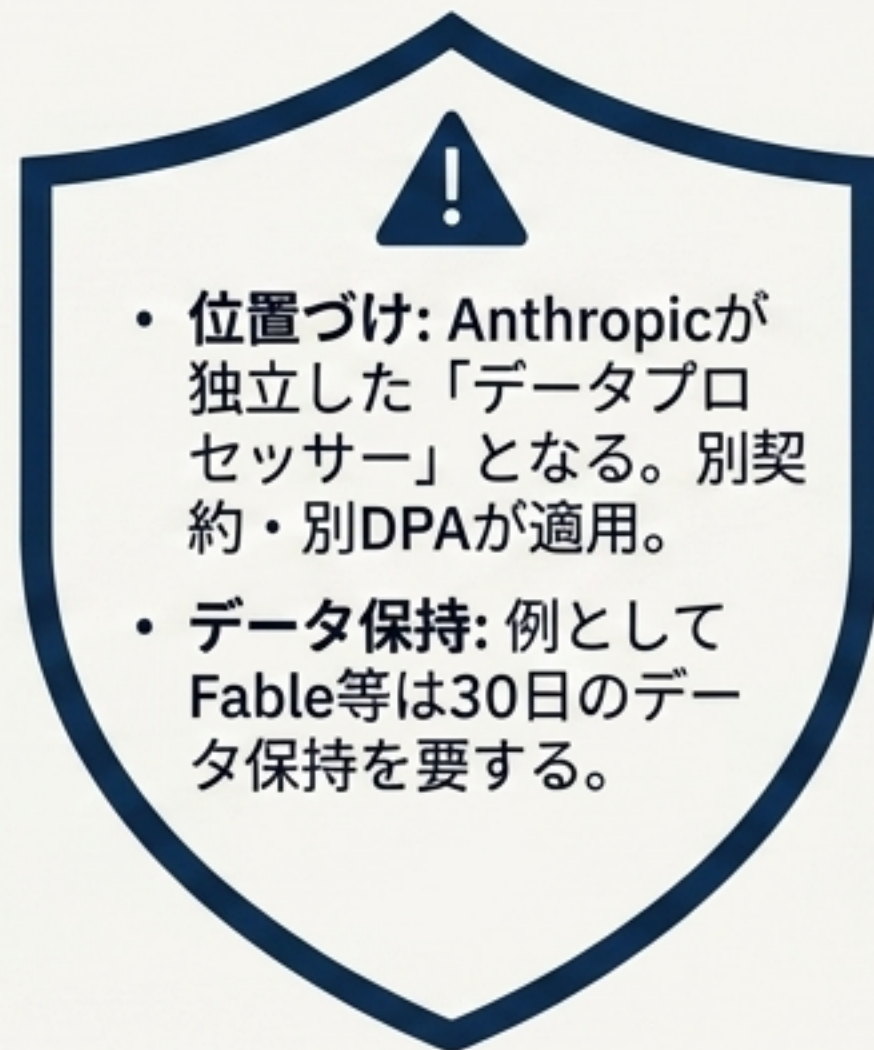
「ClaudeもCopilot内だから完全に同じガバナンス」という認識は危険。地域規制や顧客監査に直結するリージョン越境リスクが存在する。

契約境界の複雑化：モデルによって適用されるDPA（データ処理契約）が異なる。

Standard Anthropic Models



Preview Models with Data Retention



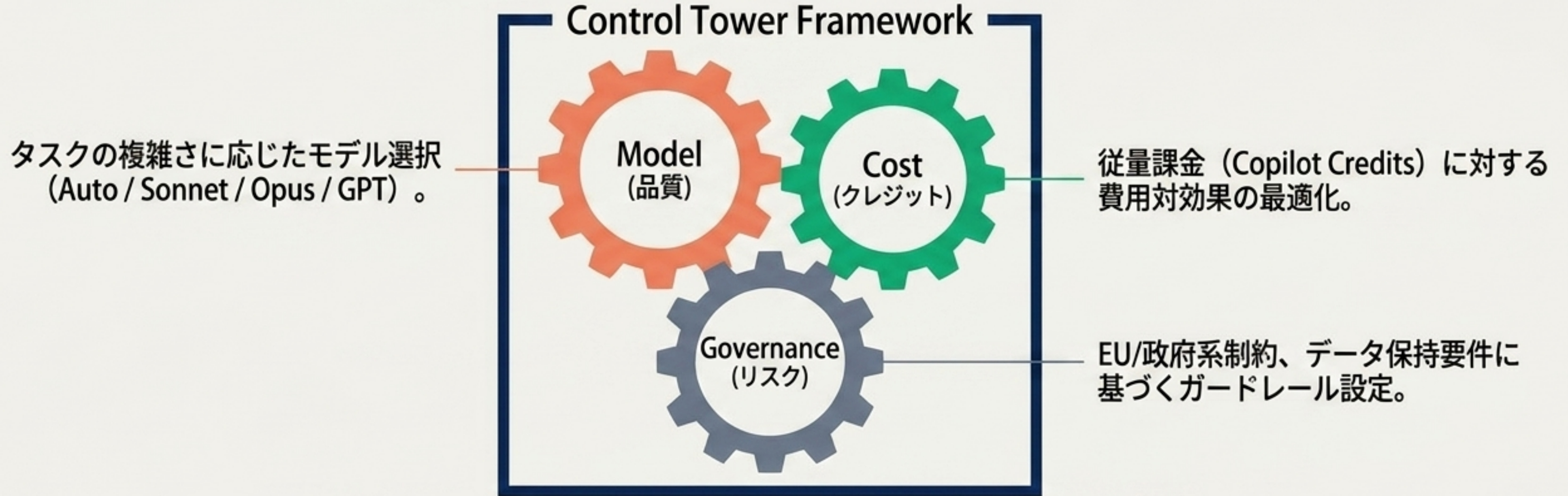
同じAnthropicファミリー内でも、モデルごとのデータ保持要件の差を理解せずに一律に許可すると、重大なコンプライアンス事故に繋がる。

新たな課金パラダイム：6月以降、「固定費」から「固定費+従量課金」のハイブリッドへ。



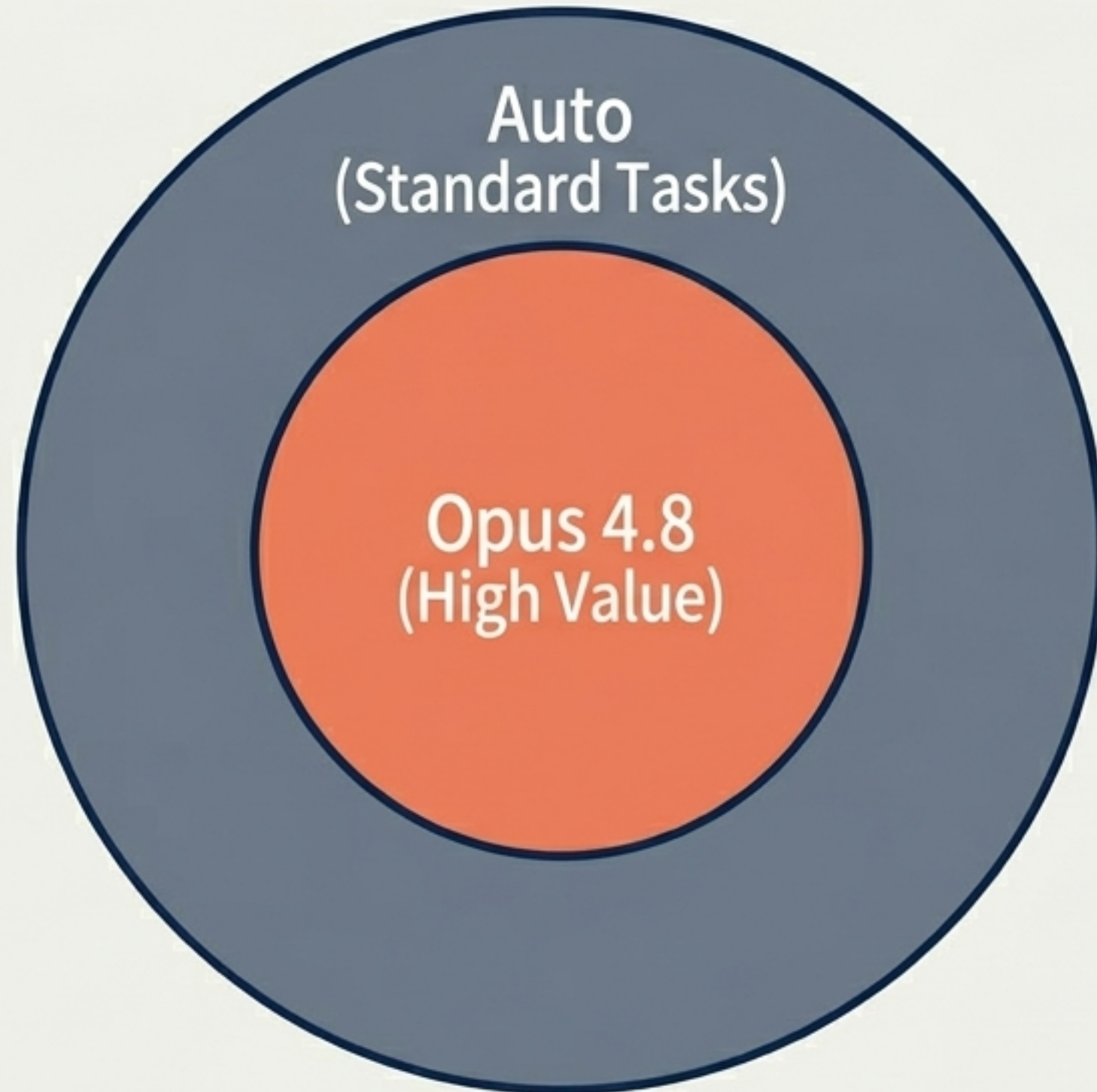
Opus 4.8追加自体への単独課金はないが、Cowork GAに伴う「Copilot Credits」制への移行により、現場は「使えるようになった」から「どう予算（クレジット）を統制するか」という運用課題に直面している。

「人」ではなく「ユースケース」にAIを投資する モジュラー式運用へ。



Claude Opus 4.8の追加は、単なる『頭の良いAIへの差し替え』ではない。企業の知識労働を、全社一律のツール導入から、「1ユースケース当たりでコストとモデルとガバナンスを設計する」モジュラー式運用へと強制的にアップデートさせる出来事である。

Action 1: 「全社一律開放」を避け、高付加価値シナリオでパイロットを回す。



1. 特定

複雑な調査、Excel分析、PPT作成、法務・財務レビューなど「多段分析」と「高い誠実性」が求められる業務を特定する。

2. 結合

モデル単体の性能に依存するのではなく、「Work IQ」や「Copilot Notebooks」等の社内文脈とのグラウンディングを併用する。

3. 教育

ユーザーに対し「とりあえずOpusを使う」のではなく、タスクに応じたモデル選択（Advisor構成等の活用）を教育する。

Action 2: リージョン制約とデータ分類に基づく ガードレールの明文化。



地理的例外の把握

EU/EFTA/UK環境、およびGCC（政府系クラウド）におけるAnthropicモデルの可用性と既定無効の設定を確認する。

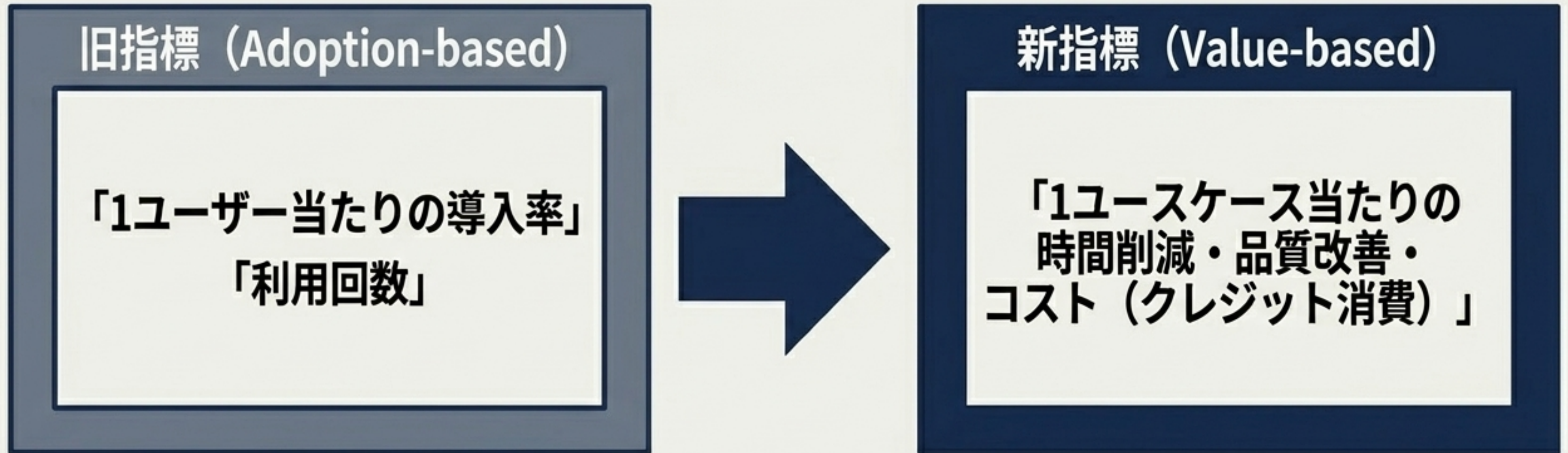
アクセス制御

ユーザー/グループ単位でのAIプロバイダー制御機能（管理設定）を活用し、高リスクデータを扱う部門にはモデル利用制限をかける。

契約監査

ZDR（Opus 4.8等）とデータ保持モデル（Fable等）の適用DPAの違いを法務部門と連携して社内ポリシーに反映する。

Action 3: 価値評価指標 (ROI) の再定義。



6月以降のCopilot Credits従量課金を前提とすれば、「どれだけ使われたか」ではなく「どこで圧倒的な成果を生んだか」が問われる。このパラダイムシフトに適応できた企業だけが、真のマルチモデルAI時代の勝者となる。